

スタンフォード研修報告書

NTT東日本関東病院 尾本 恵里

今回、スタンフォード大学にて2008年7月20～7月27日に行われた海外研修について3つのテーマで報告いたします。

1. 参加した目的とその結果

私は、米国における放射線診断と治療、最新医療を目で見て放射線治療の研究を行うための必要な知識及び技術を習得し、放射線治療の業務分担の詳細について日米の相違を理解したいと思い、参加しました。

放射線治療の業務分担に関しては医学物理士が6名、そのうちResearchに4名配属されているので、臨床は2名が担当し、治療計画を立てその線量の測定を行うということでした。治療を専門とする技師は6名で、Cyber knife装置2台に3名、リニアック装置2台に3名が担当しており、装置に対する人員配置は日本とあまり変わらない印象を受けました。そして、特に分業化されたアメリカを実感したのは、治療計画用CTを撮影する専門技師が専属でいるということでした。

研究発表をするにあたり重要な事のひとつとして、自分が研究した内容をわかりやすく表現するプレゼンテーション能力があります。講師の先生方のプレゼンテーションはととても引きつけられるものがあり、内容はもとより表現力の素晴らしさにとても感動しました。今後研究発表をするときに是非参考にさせていただきたいと思いました。

2. 日本と米国の放射線技師制度の違いをどの様に感じたか

各モダリティの専門性は強く、スペシャライゼーションが必要なモダリティが大半であり、誰が検査しても常に同じ画像が提供できるシステムになっていました。分業化された業務は他のモダリティの情報交換を特にしていないこともわかり、そのような点で言えば、日本は各モダリティをほとんど取扱うことが出来るし、他のモダリティの方との情報交換をするので視野の広い診断・治療が提供できているのではと思いました。

3. 今回の研修で得たことを今後どのように活かしたいか

今回の研修で得られたことは、分子イメージングの新しい領域の講義で、疾患の診断だけではなく、治療においても大きな役割を果たすことがわかりました。今後は治療計画時の参考資料として臨床に役立てられたらなと思います。

研修を通じての学术交流はスタンフォードから得た部分ばかりでなく、研修に参加された方々のモチベーションにはとても刺激を受けました。食堂にてそれぞれが、各分野で研究していることを発表しあいましたが、研究内容のレベルの高さや研究に対する自信や熱意を感じ、圧倒されてしまいました。帰国してからもこの刺激がやる気に反映して業務や研究に活かせるように頑張りたいと思います。

最後に、本研修に際して多大な御尽力をいただきましたスタンフォード大学、日本放射線技術学会およびGEYMSの皆様、そして今回この研修に参加することを快く承諾していただきましたNTT東日本関東病院の技師長をはじめスタッフの皆様には深く感謝いたします。



MR担当のTeresa Nelson氏と筆者